

## オノマトペに現れる促音について

那須昭夫

## 1 はじめに

小論では、日本語オノマトペに現れる促音の役割について考察し、オノマトペの形態論的単位について考える。オノマトペは現実世界との有契性の強い語種とされ、一般語彙とはかなり異なった性質を持つ。その特異性は、和語の頭音法則や連濁規則の不適用といった音韻的側面をはじめとするさまざまな観点から観察されている。そのような中で、オノマトペの「語」の単位とはどのようなものか、という形態論的観点からの考察は、十分に行われているとは言えない。たとえば、オノマトペは「と」「に」などの機能語を含むことが多いが（例：ピカッと、ドロドロに）、そのような機能語を含んだ全体の形を語とみなすのか、あるいは機能語を除いた形が語の単位なのか、はっきりとしない部分がある。オノマトペに現れる促音は、このような点に深く関わっているとみられる。たとえば、機能語を統語論における要素として完全に排除すると、「コロッと」「ピカッと」のような形では「コロッ」「ピカッ」のような促音で終わる形態が語として存在することになるが、このような形態は日本語の音配列上の制約に著しく違反した形である。逆に、「と」を含んだ形が語であると画一的に考えると、「ピカッ、ピカッ、ピカッ、ピカッ、と」のようになり長い単位までもが語として把握されることになる。そこで小論では、オノマトペが副詞として働くか、それとも引用の対象となるかという点に着目しつつ、現代日本語のオノマトペの形態上の単位について考察してみたい。なお、オノマトペに含まれる促音には以下のように二種類のものがある。

- (1) a. カッちと、バッタリ（と）、ガッタン（と）
- b. シュッと、コロッと、グラッグラッと、ジャッと

Hamano(1986) は、(1a) に現れる促音は強調を表すために語中に挿入されたものであり、一方で(1b)の促音には強調を表す機能がないとしている。小論で主に取り上げようとするのは(1b)のタイプの促音である。

## 2 先行研究

### 2.1 オノマトペ標識とその解釈にみられる問題点

オノマトペの最も代表的な形態が「コロコロ」「ピカピカ」のような反復形であるとの分析は、これまでのオノマトペ研究の中でほぼ一般化した見解である。同時に、反復形から「コロ」「ピカ」などの二拍の単位が抽出できるという分析も、多くの日本語話者の直観に基づくものであると思われる。つまり反復形は二拍の形態のくり返しによって生じた形であると考えることができる。たとえば小林(1965)は、反復形オノマトペが二音節の「語基」のくり返しであるとし、西尾(1988)も、反復形が「もとになる語根」のくり返しによって形成されると述べている。語基なり語根なりの基本単位から派生したとみられる形態は、反復形以外にもいくつか存在する。Waida(1984)は、反復および基本単位の末尾に現れる促音・撥音・リ語尾などを「オノマトペ標識」と総称し、次に挙げるようなオノマトペが基本単位への標識の添加によって形成されると分析している。

#### (2) オノマトペ標識の添加 (Waida1984)

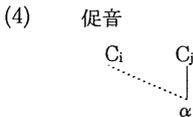
- a. XY ×反復：バタバタ・ドサドサ・ヒタヒタ・ヒシヒシ
- b. XY+N：ドシン・ドサン・ドキン・ザブン・パタン
- c. XY+ri：ドシリ・ドサリ・ドキリ・ザブリ・パタリ
- d. XY+Q：ドシッ・ドサッ・ドキッ・ザブッ・ピタッ

このような分析も、先行諸研究にかなり共通したものであると思われる、たとえば天沼(1989)は日本語オノマトペの形態を総覧する上で、「ゴロ」と「ゴロツ」を別個の項目として挙げているが、このような扱いは、前者を標識を伴わない形として、後者を基本単位に標識が添加された形として把握していることの反映であると言えよう。標識をまったく伴わない形を西尾に従って「語根」と称すると、Waidaなどの分析では語根が定数とされ、オノマトペ標識は対立をもたらす変数として把握されており、その形態論的派生は、語根に標識を添加するという線形序列的モデルで解釈されている。

#### (3) コロ + ツ → コロツ

さらに、それぞれのオノマトペ標識の性質の違いがオノマトペの意味の違いに反映すると考えられることが多く、たとえば撥音は、「弾んで転がる様子」(金田一 1978)・「弾力性・跳ねる感じ」(大坪 1989)・「共鳴」(田守 1993)といった意味を表象し、リ語尾は「弾んで転がること」(金田一)・「滑らかに回転する感じ」(大坪)・「ゆったりした感じ・動作や作用の完了」(田守)などの意味を表象するとされる。促音についても、「転がりかける様子」

(金田一)・「力のこもった、急迫した感じ」(大坪)・「瞬間性・急な終わり方」(田守)などを表象するとされる。このように、それぞれのオノマトペ標識が独自の意味的役割を持つとの解釈を前提とすると、ある意味を表象するために撥音・リ語尾・促音・反復などが語根に「添加」されるという形態論的分析も、一見妥当であるように思われる。たとえば、「瞬間性」や「急迫した感じ」を表象したい場合には語根に促音が添加される、という説明が与えられよう。しかし、オノマトペ標識の意味的側面についての分析をもってオノマトペの形態的側面を説明することは、はたして妥当な考察と言えるだろうか。標識の一つとされる促音について考えてみたい。上述の先行研究での説明に従うと、例えば「瞬間性」や「急迫した感じ」を表象するためには、(3)のようなあり方で語根に促音が添加されるということになるが、促音の音声学的実態から考えてそのような操作はむしろ不可能である。なぜなら、促音は無声子音の連続として実現され、その具体的音声は後続する子音からの逆行同化の過程(4)を経て決定されるからである。



また、語根に対して線形序列的に促音を添加するという(3)のような解釈は、形態論的な妥当性も欠いていると言える。促音が添加されてできあがった形態ではその末尾に促音が位置することになるが、促音で終わる形態は日本語の音配列上の制約によって許容されないからである。

## 2.2 「と」との共起

促音が形態の内部にのみ現れるという分布上の制約を考慮すると、促音だけを単独で形態の末尾に添加するという解釈は成り立たないことになるが、それでは、「コロット」「ピカッ」となどに含まれる促音の出現プロセスは、どのように説明されるのであろうか。田守(1983)および西尾(1988)などによって言及されているように、このようなオノマトペは必ず「と」を伴って文中に現れる。(4)に挙げたように、促音の実質的音声は直後に続く子音からの逆行同化によって決定されることから、促音は直後に「と」が続くことを条件として生じていると考えた方がよいだろう。つまり、一見語根に添加されたとみなされる促音も、実は「と」の結合を契機として生じた、二次的な要素であるということになる。

## (5) 促音の出現



すると、Waida(1984)によってなべて統一的に捉えられてきたオノマトペ標識というものを、再度解釈しなおす必要が生じてくる。撥音や「リ」語尾、および同一語根 (= 反復) は単独で語根に添加可能であるが、促音はそのような過程では生じない。したがって (6) にまとめたような体系が抽出できる。

## (6) オノマトペ標識の「添加」

- a. 派生：語根 + 標識
- b. 付加される要素：撥音・リ語尾・反復 (同一語根)

つまり、線形序列的に添加できるのは (6) に挙げた要素だけということになる。以上のような点から、促音をオノマトペ標識と捉えた場合でも、それはあくまでもオノマトペの静的体系に「含まれている」ものであり、動的に「添加」されるものではないと解釈すべきであろう。

## 3 引用部となるオノマトペ

## 3.1 「と」の二つの機能

オノマトペが副詞の一部として機能するとの見解は、これまで多くの研究者によって指摘されてきたことだが、一方で、場合によってはオノマトペが現実の音や様態を模倣したものとして文中に引用されていると解釈することも可能である。多くの場合、オノマトペには助詞「と」が伴うが、その機能が引用部を導くものなのか、あるいは副詞の一部を構成するものなのか、判断しづらい場合がある。国立国語研究所 (1951) は「と」の用法をいくつかに分類しているが、オノマトペに関係する用法は、その4に相当する。

- (7) 1. 相手・共同者を示す。
2. 比較の基準を示す。
3. 転化する帰着点を示す。
4. 動作・作用・状態の内容を示す。
  - イ) 次に来る動作・状態の内容を指定する。

- ロ) 引用語句であることを示す。
- ハ) 次の動作・作用を起こす心理的前提・動機を示す。
- ニ) 動作・作用のしかたを示す。
- ホ) 副詞語尾

の内容もかなり細かく分類されているが、議論の煩雑化を避けるために、オノマトペに現れる「と」には 1)「引用を導くもの (=ロ)」と、2)「副詞を構成するもの (=ホ)」の二つがあると単純に考えておきたい。すると、「と」とオノマトペとの関係は次のようにまとめられることになる。

- (8)a. [オノマトペ] によって表象される実際の音や様態の模倣を、「と」が引用する。
- b. [オノマトペ] + 「と」 で一体化した副詞であり、「と」は副詞語尾である。

ただ、国研がこの二つの用法を同じ 4 の枠に分類していることから伺えるように、両者を厳密に区別することは容易なことではない。このことは、オノマトペの部分が副詞の一部であるか引用の対象となるか半別しづらいということと、表裏をなす問題である。たとえば山崎 (1993) は、次の二つのオノマトペを、引用部となりうるかどうかという視点において区別すべきであるとしている。(下線筆者)

- (9) a. トン, トン, トン, トンと合図をした。
- b. ドスンと足を踏み鳴らした。

山崎は、(9a) を「厳密には言語表現を内容とする事態ではないが、広い意味での言語行為」であるとし、「と」で取り出した部分が、述部の内容になっている」と解釈している。一方、(9b) のオノマトペは言語表現ではないとし、(9a) の「と」だけが引用の機能を持つと結論している。しかしながら、山崎がどのような理由で(9b)の「ドスン」を引用部となりうる「言語表現」から除外したかは明らかではない。

### 3.2 引用部となるオノマトペの性質

山崎が挙げた二つのオノマトペの間には、次のような違いが観察される。(9a) の場合、「トン」という語根のくり返し回数は発話者の任意に依存しており、場合によっては五回くり返しても、あるいは反対に三回だけしか繰り返さなくてもよい。それは現実の音のあり方を反映するものであり、特定の回数が語彙的に決まっているわけではない。すなわち、この場合のオノマトペの形態は一定しておらず、発話者の判断によって随時決定されていると言える。その一方で、(9b) の「ドスンと」は語彙的に決まりきった形であり、発

話者はその既定の形を用いていると言える。オノマトペは現実世界との有契性の強い語種であるとされるが、現実世界の音なり様態なりを模倣する場合には、話者の任意によってオノマトペの形態に変異が生じる可能性がある。たとえば(9a)では語根が反復を受けているわけだが、任意回数反復されたこの形は、語根反復形の代表的形態である「コロコロ」「キラキラ」などの四モーラの形とは明らかに異なる効果をもたらしている。これは四モーラ形が語彙的に決まった形態である一方で、語根を任意回数反復した(9a)は話者によって半ば独自に作り出された形態だからであると考えられる。一方、オノマトペが言語記号としての性質も有しているという点を考慮すると、(9b)「ドスン」などは記号としての性質を強く持った形態であると言える。なぜなら、語根に撥音が添加された同様の形態を持つオノマトペが数多く存在しているからである。また、「ドスン、ドスン、ドスンと音がした。」のように、発話者の任意でくり返し形が作られるとき、「ドスン」はくり返しの基本単位として位置付けられる。このような基本単位に「と」のついた形は、いわば最も規模の小さな語の単位である。つまり、語彙的に定まった形態であると判断することができるのである。このようなことから、一定の形態に収まるかどうかということが、オノマトペの文法的性格を判断する基準の一つとなるとみてよい。この点は第三節で詳述することになるが、「一定の形態」には反復形・撥音付加形・リ語尾付加形など、量的にも質的にも一般性の高いものが相当する。このようなオノマトペは、言語使用の中で慣用化が進んでいるというようなことから一般語彙と同様に記号としての性質を持つingと考えられる。一方で、形態的に安定しないオノマトペ、すなわち、語彙的に一般化した形態になんらかの音調の変化や強め、長音化などの特別な要素が加わったオノマトペは、引用の対象となる傾向が強いと言える。

### 3.3 モデルケース

このような基準に基づいてあるオノマトペが副詞(の一部)であるか引用部であるかという判断を行なう際に、そのモデルケースとなると思われる現象が、次に挙げたような対立である。

- (10) a. ガタガタ (と)  
 b. ガタガタツと

田守(1983)は、(10a)のような反復形オノマトペが「と」を義務的に伴わないことから、これを副詞としての語彙性の高い形態であると述べている。一方、(10b)も反復形であり、促音と「と」を除けば(10a)と全く同一の形態をなしているが、こちらの場合には「と」は義務的に必要とされる。また、音韻的側面に着目すると、両者の間にアクセントの違い

を見出すことができる。(10a) は、最初の「ガ」の拍にアクセント核が位置する頭高型であるが、(10b) ではアクセントが平板化している。この両者をそれぞれ別個の現象として考えるよりは、両者を関連づけて、(10a) の形態に音韻的に変化が加わった結果 (10b) が形成されると考えた方がよいと思われる。(10b) にみられるようなアクセントの変化に類する音調変化は、興味深いことに一般語彙からなる文では直接引用の指標として捉えられることがある。たとえば次のような二つの引用文を対比してみたい。

- (11) a. 彼女は、あんたなんか嫌いだわ、と言った。  
b. 彼女は、僕のことが嫌いだと言った。

(11a) 下線部は直接引用部であり、(11b) 下線部は間接引用部である。(11a) では、引用部分の終助詞「わ」において上昇調のイントネーションが現れることがあるが、これはこの文の発話者が、元の発話者の発話の様子をできる限り忠実に再現しようとした結果として現れた、特別な音調として理解できる。他方、間接引用文 (11b) の引用箇所では、元の発話者の用いた音調や助詞の使い方などがそのまま再現されることはない。砂川 (1989) に述べられているように、直接引用では「文の意味内容だけではなく表層的な形式」が再現されているという点が特徴的であり、その手段として音調変化が用いられていると言えるだろう。その意味で、(10b) の形は一般の文における直接引用と非常に近い性質を持っている。この両者に共通するのは、引用元となる発話なり現実世界の音や様態なりの形式的側面を音調に反映させているという点である。したがって (10b) は、(10a) と同じ形のオノマトペを用いているものの、そこに特別な音調変化が与えられていることにより、現実の音の模倣をそのまま引用した形式として解釈することができる。そして、すでに (10a) のような語彙化した形式があるにもかかわらず、(10b) のような形式が同時に用いられるのは、音調変化を加えた形式が、(10a) の形式では表し得ない効果を伝達する機能を持っているからであると考えられることができる。

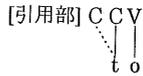
### 3.4 引用と促音

以上のような観点から、(10b) の「ガタガタ」は引用部として解釈されることになるが、次に「と」の前に現れる促音がどのような役割を持ったものなのかという問題について考えてみたい。オノマトペの部分が引用部であることから、「ガタガタッと」という形式は次のように解釈される。

- (12) [引用部] + ット

この場合において促音が現れるプロセスは、第一節で検討した通りである。すなわち、「と」に伴って副次的に生じると考えられることから、(13)のような過程を想定する必要がある。

(13)

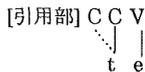


このモデルで注目すべき点は、オノマトペ部分が「と」によって引用される際に、もともと存在していなかったCスロットが新たに挿入されるということである。これに対して同じ引用の文でも、例えば一般の間接引用文「彼は海へ行くと言っていた。」では、引用部「海へ行く」と「と」の間には促音は現れない。なぜ、オノマトペが引用される場合に限って、Cスロットが挿入されるのであろうか。ここで、この場合の促音挿入が、オノマトペの引用の標識として機能していると考えてみたい。このような機能を認めることの妥当性は、次のような観点から論じることができよう。話し言葉では、「って」という形式が引用の「と」と同じ機能の下で用いられることがある。例えば、次の文では「って」の部分が「と」に置き換え可能である。

(14) 彼は、海へ行くって言っていた。／彼は、海へ行くと言っていた。

(14)では「海へ行く」の部分が引用部となり、「って」がそれを引用していると言える。この「って」という形式であるが、これが [tte] という音形を与えられてレキシコンに存在するとは考えられない。なぜなら、促音で始まる形態は日本語の音配列上の制約によって認められないからである。したがって、レキシコンには [te] という形態が登録されており、促音は派生の段階で生じる要素として考えた方がよい。つまり、引用部に対してはまず [te] が結合し、次いで促音が現れると解釈されることになるが、その様子は (13) に示した過程と全く同様に、引用部と「て」の間にCが挿入され、「て」の頭子音がそこに拡張するという過程で説明できる。

(15)



「って」は、必ずその直前に引用の対象となる語句を要求する。このため「って」の促音に対して引用の標示機能を認めることができる。さらに引用対象には一般の語句だけでは

なく、オノマトベもこれに相当できる。たとえば次のように「って」で「ガタガタ」を引用した形は、(10b) に示した「ガタガタッと」と形式上等価である。

(16) 窓がガタガタッて鳴った。

また、次に示したように、「って」は、「ちょっと」「ずっと」「きっと」などのオノマトベ起源の副詞 (玉村 1989) とは共起できないのだが、

(17) \*ちよって行ってきます。(cf. ちよと行ってきます。)

ずって歩きつづける。(cf. ずと歩きつづける。)

きって来るだろう。(cf. きと来るだろう。)

その理由は、たとえオノマトベ起源の副詞であっても、語彙化してしまったものは引用の対象としては働かないという点に求められるだろう。引用の対象として働かない要素と「って」が共起できないということは、「って」がもつばら引用の機能を発揮しているからにほかならない。しかも「って」の促音は (15) に示したような過程によって生じ、その過程は (13) 「つと」での促音生起過程と同様のものと判断される。特にオノマトベにおいては、(16) と (10b) の対比から、<「つと」=「って」>という関係を見出すことができる。このように、「つと」および「って」の促音が引用に際して現れるという共通点を持っていることから、これらの促音が引用の標識として機能していると考えることができるのである。このため、「ガタガタ」が副詞として機能している場合 (=10a), すなわち「と」を随意的に伴う場合に促音が挿入されないのは、語彙化した副詞がもはや引用の対象とはならないという点にその理由を求めることができる。

#### 4 オノマトベの語彙的形態と韻律単位

最後に、オノマトベが副詞の一部として機能する場合の韻律的単位について考察することにしたい。田守 (1983) は、「ピカピカ」「コロコロ」などの四モーラの形が「と」を伴わずに文中に出現できることから、これらがオノマトベの中で最も語彙的安定性の高い形態であると述べている。「にっこり」「すんなり」など、リ語尾を伴って語中に促音あるいは撥音が挿入された形も「と」を伴わずに副詞として機能するが、これらの形態もやはり四モーラからなっている。このようなことから、オノマトベにおいては四モーラの韻律単位を安定性の高い形態単位として認めることができる。四モーラに収まるオノマトベはこの他にも以下のようなものが挙げられる。

(18) a. コロリと、パチリと、バタリと、ズシリと

- b. コロンと、パチンと、バタンと、ズシンと  
 c. コロツと、パチツと、バタツと、ズシツと

これらのオノマトペでは、反復形とは違って「と」が伴うことによって四モーラの形態となるが、「と」を欠いた形は文中に出現できないことから、田守の言うように「と」も含めた形が一つの副詞として語彙化されていると考えてよいだろう。つまり、この場合「と」は語彙部門で付加される要素であり、統語構造で引用の助詞として付加されるものではないことになる。仮に「と」が統語論的処理によって結合する要素であると考え、特に(18c)では、語彙部門からの出力形式として「\*コロツ」のような促音で終わる形態を想定しなければならなくなるが、このような形態が日本語の音配列上の制約にそぐわない形であることは以前に述べた通りである。(18)のオノマトペが語根からどのように派生するか考えてみると、まず、(18a, b)に現れるり語尾と撥音は、第一節で検討したように特定の意味を表すオノマトペ標識として語根に添加され得るため、次のような線形序列の派生モデルに基づいてその派生を解釈することができる。

(19) コロ + リ, /N/ → コロリ/コロン

この派生が完了した段階では、全体のモーラ数はまだ四モーラに至っておらず、「と」が結合することにより四モーラの単位が形成されて副詞として機能するようになるが、その際、「と」は文法的には副詞を導く語尾として、一方形態的には四モーラという単位を充足する要素として働いているものと考えられる。ちなみに、「コロコロ」などの反復形では「と」は義務的には必要とされないが、これは、四モーラの韻律単位の形成が反復によってすでに達成されているからであると言えよう。以上のような点から、「と」は派生(標識の添加)の結果生じた形態が四モーラに満たないときに義務的に共起する性質を持っていると結論することができる。ところで第一節で検討したように、(18c)に現れる促音は語根に直接添加されるのではなく、「と」が結合することによって生じる副次的な要素である。つまり、派生の序列としては「と」が第一次の派生であり、促音は「と」の結合を前提として生じていることになる。

(20)

C	V	C	V	C	C	V
k	o	r	o	t	o	o

前節では、「と」に随伴する促音挿入が引用の標識として機能することを述べたが、「コロツと」のように全体で四モーラをなすオノマトペの場合には、促音は引用の標識としては

機能していないと考えられる。既述のように、あるオノマトペが引用部となりうるのは、語彙化したオノマトペの形態に対してなんらかの音調変化などが加わった場合や、語根が発話者の任意によって何回か反復された場合である。たとえば、前節で検討した「ガタガタッと」は、もとの「ガタガタ」という語彙化した形にアクセント変化を加えることによって、「ガタガタ (と)」では表し得ない効果をもたらすものとして用いられていると考えられるのだが、「コロッと」のように二モーラの語根が「つ」と共起している場合には、促音を伴わない「\*コロと」という形が文法的な形態として存在し得ないため、「\*コロと」に音調変化を加えた結果「コロッと」が形成されたとは考えられないことになる。このような点から、(18c)の形態に含まれる促音は、引用の標識としての機能を持っておらず、むしろ語彙的に定着した形態の一部となっていると考えることができるだろう。これまで検討してきたように、オノマトペによる副詞の形成にはある一定のパターンが存在しており、特に、四モーラという韻律的単位が重要な役割を果たしていると考えられる。そこで、オノマトペに要求される語の単位を、韻律的視点から次のように一般化してみたい。

(21) 語(オノマトペ) = 4モーラ

この一般化は二モーラの語根を持つオノマトペについて適用され、四モーラの韻律単位を満たすことがオノマトペが副詞（あるいは副詞の一部）として機能するための条件となっているということを意味している。また、このような一般化を施すことによって、「コロリ」「コロン」など、リ語尾や撥音を伴うオノマトペで「と」が義務的に必要とされるしくみや、「コロッと」のようなオノマトペに促音が義務的に現れる理由などを十分に説明することが可能となる。

## 5 おわりに

以上検討してきたように、オノマトペに現れる促音には、1) 引用の標示、2) 韻律単位の充足要素という、二つの働きがあると考えられる。前者は、語彙的に定まった形態に対してなんらかの音調の変化が加わり、現実の音や様態の表層的な形式を模倣した場合に現れる。他方後者は、二モーラの語根を持つオノマトペが語としての資格を認定される際の韻律的単位（四モーラ）を充足する要素として存在していると言える。

### 付記

本研究は、平成六年度文部省科学研究費奨励研究の研究成果の一部である。

## 参考文献

- 天沼 寧. (1989) 「擬音語・擬態語」 『日本語教育』 68: pp.13-29.
- 大坪併治. (1989) 『擬声語の研究』 明治書院.
- 金田一春彦. (1978) 「擬音語・擬態語概説」 浅野鶴子(編) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店.
- 国立国語研究所. (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 (国立国語研究所報告 3) 秀英出版.
- 小林英夫. (1965) 「擬音語と擬容語」 『言語生活』 171: pp.18-29.
- 砂川有里子. (1989) 「引用と話法」 北原保雄(編) 『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体 (上)』 明治書院.
- 玉村文郎. (1989) 「日本語の音象徴語の特徴とその教育」 『日本語教育』 68: pp.1-12.
- 田守育啓. (1983) 「オノマトペ—音韻形態と語彙性」 『人文論集』 19-2: pp.63-85. 神戸商科大学経済研究所.
- 田守育啓. (1993) 「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」 『言語』 22-6: pp.70-78.
- 西尾寅弥. (1988) 『現代語彙の研究』 明治書院.
- Hamano, Shoko. (1986) *The Sound Symbolic System of Japanese*, Ph. D. dissertation, University of Florida.
- 山崎 誠. (1993) 「引用の助詞「と」の用法を再整理する」 『研究報告集 14』 (国立国語研究所報告 105) 秀英出版.
- Waida, Toshiko. (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures. 『女子大文学』 外国文学篇 36: pp.55-79. 大阪女子大学英文学科.

## On the Roles of *Sokuon* in Japanese Onomatopoeia

Akio Nasu

A Japanese onomatopoeia always has a 2-mora sized basic structure(=root), and must include an onomatopoeia marker at its right edge. There are 4 types of markers: reduplicated root, mora nasal /N/, suffix 'ri', and *sokuon*(=geminated consonant). Traditionally, all of them have been treated as independent elements which can be added to the onomatopoeic root in a linear fashion. A geminate, however, cannot be added directly to the root because of its phonetic property. This observation leads us to the consequence that a geminate is not a marker being added but an element which occurs as a result of assimilation. In addition, the *sokuon*-phenomenon co-occurs with '-to' which functions both as a marker of quotation and as a suffix that forms an adverb. In the former case, the geminate appears in the right edge of the reduplicated form as a marker of quotation. On the other hand, the geminate in the latter case appears at the third mora position in the 4-morae template. This template corresponds to a minimal onomatopoeic word size and a maximal limit of lexicalized adverbial onomatopoeia.